

移動サービスボランティアのHさんは今年63才。  
利用者のIさんは56才。

車の乗り降りもキビキビ、病院内もスタスタ歩く。  
Hさんの首から下げた会員証とユニフォームのエプロンで、どうにか利用者と  
介助者の違いが判別できる。

当然、病院の待合室の目は怪訝な表情。  
以前には、心得顔の患者の家族が注意した。  
「私も、介護の資格を持っているけど、あんな元気な人に付き添い介護はおか  
しいんじゃないの。」  
「見ていたら、ヘルパーさんの車に乗せてきたようだけど、法律違反で罰せら  
れるわよ」

「わたしは、〇〇会のボランティアです」  
「いくらボランティアでも、あんな元気な人まで通院介助を行うのは、変よ！」  
「市の福祉課に電話しちゃうわよ！」  
Hさんは言い返すことも無く、診察券を出しIさんのそばから離れない。

Iさんは、若年性アルツハイマーを発症して3年。  
日常会話はそつなくやり取りできる。  
更に厄介なのは、見かけがスタイルも良いし、美形なのである。  
ただ・・・ほんの数分前の事柄が記憶できない。

受診が終わり、薬を受け取ってIさんを自宅に連れ帰る。  
Iさんは、車外の景色を眺めて鼻歌を歌っている。

Hさんは複雑な心中で呟く。  
「なんか変・・・誇りを受けながら、何でボランティア？・・・」

自宅に着いて、ご高齢の両親がお出迎え。  
「ありがとうございました。本当に助かっています」  
Hさんの揺れる心に栄養剤。  
「誰かが支えなくちゃ・・・」

(2010年6月 茨城)

